

主 題：より多くの実を結ぶために1

聖書箇所：ヨハネの福音書 15章1－8節

◎実を結ぶことの重要性

もし、私たちが何かの苗木を植えたとすると、その実や果実がなるのを期待します。神も同じです。神は私たちを愛し、実に多くの恵みを与えておられます。私たち一人ひとりのことを顧みてくださっているのです。その神は私たちにこのようなことを期待しておられます。それは、「主が喜ぶような実を結んで行く」ということです。みことばがはっきりと私たちに教えていることは「神によって救われた信仰者は必ず良い実を結んで行く」ということです。あの、バプテスマのヨハネも、マタイ3：8で「悔い改めにふさわしい実を結びなさい」と民たちに命じましたし、イエスもマタイ7：16で、本物の教師とにせ預言者たちとを「実によって…見分けることができます」と教えておられます。また、パウロも牧会者であったテトスに送った手紙3：14で、「私たち一同も、なくてはならないもののために、正しい仕事に励むように教えられなければなりません。それは、実を結ばない者にならないためです。」と教えています。このように神が喜んでくださるようなすばらしい実を私たちは結んで行くことができるのです。実に、そのためにイエスは今日のこの箇所を語ってくださったのです。今日、私たちは、このヨハネ15：1－8を通して、私たちがより良い実を結んで行くために必要なことをごいっしょに学んで行きます。そうすることによって皆さんが、益々、多くの、そして、神に喜んでいただけるような実を結んで行く者となって行かれることを心から願います。

☆より多くの実を結ぶために必要なこと

1. 主が与えてくださる訓練を喜ぶ 1－6節

私たちがより多くの実を結ぶために必要なこと、その第1番目は主が与えてくださる訓練を喜ぶということです。私たちのことをだれよりもよくご存じの神が与えてくださる苦難や、また、チャレンジを感謝して歩んで行くということです。

- 1 わたしはまことのぶどうの木であり、わたしの父は農夫です。
- 2 わたしの枝で実を結ばないものはみな、父がそれを取り除き、実を結ぶものはみな、もっと多く実を結ぶために、刈り込みをなさいます。
- 3 あなたがたは、わたしがあなたがたに話したことばによって、もうきよいのです。
- 4 わたしにとどまりなさい。わたしも、あなたがたの中にとどまります。枝がぶどうの木についていなければ、枝だけでは実を結ぶことができません。同様にあなたがたも、わたしにとどまっていなければ、実を結ぶことはできません。
- 5 わたしはぶどうの木で、あなたがたは枝です。人がわたしにとどまり、わたしもその人の中にとどまっているなら、そういう人は多くの実を結びます。わたしを離れては、あなたがたは何もすることができないからです。
- 6 だれでも、もしわたしにとどまっていなければ、枝のように投げ捨てられて、枯れます。人々はそれを寄せ集めて火に投げ込むので、それは燃えてしまいます。

◎では、どうして私たちは神からの訓練を喜ぶべきなのでしょう？

1) それによって「救われている」ことが分かるから

神から約束されている訓練、あるいは、試練と言い換えても良いかと思いますが、それを経験することによって、その人は「確かに、自分は救われている」という確信を強めることができるのです。まず、1節をご覧ください。「わたしはまことのぶどうの木であり、わたしの父は農夫です。」というこの始まりのことばで、イエスがぶどうの木に関するたとえ話をしておられることが明らかです。このヨハネ15：1－6を読むと、ぶどうの木がイエスを表わし、農夫が父なる神で、ぶどうの枝が私たち人間を表わしているということはすぐに分かります。中でも、特に、ここで皆さんに注目していただきたい箇所は2節の「刈り込みをなさいます」という部分です。「刈り込み」とは、ぶどうの枝に対してぶどうの実がよりたくさん実るように、また、貧弱な実ではなくより良い実をつけることができるように、敢えて、一部のぶどうの枝を切り取ることです。そうすることによって、余計な所に木の養分が行くことがなくなり、その分、果実に栄養分が行き渡ってより良い実がなるという訳です。

実は、この2節で「刈り込みをなさいます」と訳されていることばは、「刈り込む」とか「剪定する」といった意味だけでなく、「余分なものを取り除く」とか「清潔にする」などの意味もあることばなのです。このことばの名詞形は、「清い、清潔な、純粋な」という意味をもつことばで、すぐ後の3

節でも使われています。「あなたがたは、わたしがあなたがたに話したことばによって、もうきよいのです。」つまり、神がそのお語りになったみことばを用いて、私たちがきよい者へと変えてくださったということです。人は神のみことばによって、本当の意味で、霊的にきよくされるのです。ローマ人への手紙10：17にも「そのように、信仰は聞くことから始まり、聞くことは、キリストについてのみことばによるのです。」とあります。実際、私たちも、聖書のみことばを耳にすることによって、本当の神を知り、自分の罪や間違いに気付かされました。神はそのようにして私たちがきよくしてくださるのです。だから、私たちは様々な集会でもみことばを語るし、救われた後も、みことばを学んで行くのです。というのは、神のみことばこそが私たちがきよくし、私たちが成長させて行くからです。

エペソ5：26を見てください。「キリストがそうされたのは、みことばにより、水の洗いをもって、教会をきよめて聖なるものとするため…」とあります。神のみことばとは、この時代、祭司たち（＝つまり、神に仕える者たち）が神に近づくために、洗盤の水で手や足をきよめたように、私たち「教会をきよめて聖なるものと」してくれる、というのです。この直前の25節に「夫たちよ。キリストが教会を愛し、教会のためにご自身をささげられたように…」とあります。実に、私たちがきよめて聖なる者とするために、イエスはご自身をささげて十字架で死んでくださったのです。というのは、今日の箇所に戻って、2節に「わたしの枝で実を結ばないものはみな、父がそれを取り除き～」とあり、また6節でも、「だれでも、もしわたしにとどまっていなければ、枝のように投げ捨てられて、枯れます。人々はそれを寄せ集めて火に投げ込むので、それは燃えてしまいます。」という恐ろしい警告が語られています。この箇所はある意味、難解とされる箇所です。つまり、この「取り除かれる枝」というのが何を指しているのか、救われたクリスチャンを指すのか、あるいは、自分は救われていると信じている自称クリスチャンを指すのかということです。正直、私もそのどちらかと問われると決めかねるのですが、どちらかという「自分は救われている」と考えている、いわゆる、自称クリスチャンのことを指しているように思います。確かに、2節でイエスは「取り除かれる枝」のことも「わたしの枝」と言われています。しかし、神によって救われていながら実を結ばない枝など果たしてあり得るのでしょうか？4節を見ると「枝がぶどうの木についていなければ、枝だけでは実を結ぶことができません。」とあって、枝が実を結ばない原因は幹につながっていないことだと教えられています。続く5節でも「わたしはぶどうの木で、あなたがたは枝です。人がわたしにとどまり、わたしもその人の中にとどまっているなら、そういう人は多くの実を結びます。わたしを離れては、あなたがたは何もすることができないからです。」とあって、繰り返し、幹につながっていないが故に、彼らは「何もすることができない」ということが教えられています。

6節をご覧ください。ここで、イエスは一步引いて「ぶどうの木のたとえの結論」というか、一般的な原則について述べています。6節「だれでも、もしわたしにとどまっていなければ、枝のように投げ捨てられて、枯れます。人々はそれを寄せ集めて火に投げ込むので、それは燃えてしまいます。」、ここは原文ではイエスは仮定の形で話しておられます。直訳すると、「もし、人が私の中にとどまっていなければ…」となります。ここの仮定の文章にはイエスに繋がっているかないかという以外の条件を付けるべきではないと思います。ですから、新改訳では「だれでも…」と訳したのでしょうか。この「まことのぶどうの木のとえ」でのイエスの強調点は、間違いなくここにあります。つまり、だれがイエスの言われる「わたしの枝」かそうでないかということではなく、「まことのぶどうの木であるイエスにつながっているかないか」ということなのです。

では、いったい、どうしてイエスはこの2節で「わたしの枝…」ということばが使われたのでしょうか？実際に、このメッセージを聞いていた多くの者は神から特別に選び分けられたユダヤ人たちでした。彼らは自分たちが神の特別なご計画の内に入れられているということをよく承知していました。彼らは神の民であったのです。しかし、彼らは、それに安穩としていて、「自分たちは神によって特別に選ばれている民だ。だから、自分たちは、救われている。」と、そのように安易に考えていたのです。イエスはそのような者たちに対して警告を与えておられるのです。「自分はもう既に救われているから…」とそのように考えて、しっかりイエスに繋がって生きて行こうとしない者たちに対して、「あなたは自分は救われていると思っているが、本当にそうですか？あなたはしっかり救い主であるキリストに繋がっていますか？一体とされていますか？もし、そうでないなら大変なさばきが待っていますよ」と、このようにイエスは教えてくださっているのです。この聖書が教えるさばきが生易しいものでないこともイエスはここで警告しておられます。6節に「枝が火に投げ込まれ、燃えてしまう」ことが語られているように、みことばは神を信じ受け入れなかった者たちの最後を、はっきりと教えています。黙示録20：10-15に「10 そして、彼らを感じた悪魔は火と硫黄との池に投げ込まれた。そこは獣も、にせ預言者もいる所で、彼らは永遠に昼も夜も苦しみを受ける。11 また私は、大きな白い御座と、そこに着座しておられる方を見た。地も天もその御前から逃げ去って、あとかたもなくなった。12

また私は、死んだ人々が、大きい者も、小さい者も御座の前に立っているのを見た。そして、数々の書物が開かれた。また、別の一つの書物も開かれたが、それは、いのちの書であった。死んだ人々は、これらの書物に書きしるされているところに従って、自分の行ないに応じてさばかれた。13 海はその中にいる死者を出し、死もハデスも、その中にいる死者を出した。そして人々はおのおの自分の行ないに応じてさばかれた。14 それから、死とハデスとは、火の池に投げ込まれた。これが第二の死である。15 いのちの書に名のしるされていない者はみな、この火の池に投げ込まれた。」とある通りです。

このように、非常に厳しく、また恐ろしい教えがなされている訳ですが、これこそが私たちが勇気を出して語って行かなければならない教えです。なぜなら、これは現実なのです。ここにおられる皆さんは、このみことばが確実に起こる神からの警告だと信じておられるでしょう。それなら、その私たちが真剣にこのことを語るはずではないでしょうか。皆さんはいかがでしょうか？あなたは間違いなく救われておられますか？信仰ゆえの試練や迫害、また困難をあなたは経験しておられますか？イエスはヨハネ15：18－20でこのように教えられました。「18 もし世があなたがたを憎むなら、世はあなたがたよりもわたしを先に憎んだことを知っておきなさい。19 もしあなたがたがこの世のものであったなら、世は自分のものを愛したでしょう。しかし、あなたがたは世のものではなく、かえってわたしが世からあなたがたを選び出したのです。それで世はあなたがたを憎むのです。20 しもべはその主人にまさるものではない、とわたしがあなたがたに言ったことばを覚えておきなさい。もし人々がわたしを迫害したなら、あなたがたをも迫害します。…」と。もし、あなたがこの神に従って歩もうとされているなら、必ず、そこには何らかの障害や問題があるはずです。イエスがこの地上で様々な迫害をお受けになられたのと同じように、私たちクリスチャンも同じことを経験するというのです。なぜなら、この世は私たちクリスチャンの内に、かつて迫害したイエス・キリストの姿を見るからです。

マタイ5：10－12でも、イエスはこのように教えておられます。「10 義のために迫害されている者は幸いです。天の御国はその人のものだからです。11 わたしのために、ののしられたり、迫害されたり、また、ありもしないことで悪口雑言を言われたりするとき、あなたがたは幸いです。12 喜びなさい。喜びおどりなさい。天においてあなたがたの報いは大きいのだから。あなたがたより前に来た預言者たちも、そのように迫害されました。」(マタイ5：10－12)。神を知り、神によって救われた者はその神を愛し、従おうとします。ヨハネが福音書3章で教えるように、「やみ」ではなく「光」を愛する者となったからです(ヨハネ3：19－21)。しかし残念ながら、この世はやみを愛します。神ではなく全く逆の罪の方に向かって進んでいます。だから、私たちは、この世にあって、様々な衝突や迫害を経験するのです。このようにイエスは、確かに、私たちキリストに従う者たち(＝救われた者たち)には、迫害や苦しみがあるということを予め教えておられました。それは、特に、私たちがみことばに従い、神に喜ばれることを行なうて行こうとする時に顕著です。今日、ここに集まっておられる皆さんも、信仰の故に、神の前に正しいことをして行こうとした時に、いろいろな苦しみや問題を経験して来られたことでしょう。でも、それこそ皆さんが救われている証拠なのです。私たちがキリストを信じ、自分の罪を悔い改め、敬虔に生きようとする時、神に従って生きて行こうとする時、必ず、この世はあなたを迫害します。それは、今から2000年前に、世の人々がイエスとその弟子たちを迫害したのと同じなのです。ヤコブはそのことについて何と言っているでしょう？皆さんはよくご存じでしょう。ヤコブ1：2－4「2 私の兄弟たち。さまざまな試練に会うときは、それを この上もない喜び と思いなさい。3 信仰がためされると忍耐が生じるということを、あなたがたは知っているからです。4 その忍耐を完全に働かせなさい。そうすれば、あなたがたは、何一つ欠けたところのない、成長を遂げた、完全な者となります。」。このように、様々な試練があるから私たちは成長して行くことができるのです。

2) それによって、私たちが成長するから

なぜ、私たちは神からの「刈り込み」、つまり、訓練を喜びとするのでしょうか？もう一つの理由は、それによって私たちが成長するからです。私たちは神からの訓練を経験し、それらを乗り越えて行くことによって、益々、きよめられより多くの実を結ぶことができるようになるのです。神は、みことばだけではなく、様々な主の訓練を通して私たちに成長させてくださいます。その私たちに成長させようとする神の働きは、決して途中で止まることはありません。だから、パウロは、ペリピ1：6で「あなたがたのうちに良い働きを始められた方は、キリスト・イエスの日が来るまでにそれを完成させてくださることを私は堅く信じている」と教えるのです。現に、このヨハネ15：2で「刈り込みをなさいませ」と訳されている時制を観察してみると、「繰り返し、繰り返し刈り込みをされる」という意味で、そのような「刈り込み」の作業が一度や二度ではなく、継続した形でなされるということが教えられています。つまり、神の訓練は私たちが天に上げられ、イエスにお会いするその時まで続くのです。神はそのようにして私たちにいろいろな訓練や問題を与えることによって、私たちに必要な「刈り込み」を為してくださるのです。

イエスも最後の晩餐の時、弟子たちの足を洗いながらこのように言われました。ヨハネ13:10「…水浴した者は、足以外は洗う必要がありません。全身きよいのです。あなたがたはきよいのですが、みな**が**そうではありません。」、この箇所では先程のヨハネ15:3で使われていた「きよい」という名詞形が2回使われています。ここで、イエスは弟子たちに対して「きよい」と宣言してくださっていますが、「足に関してだけは洗う必要がある」と言われました。つまり、私たちの毎日の生活のことです。私たちの毎日の信仰生活が神によってきよめられて行く必要があるのです。「刈り込み」がぶどうの木にとって痛みを伴うのと同じように、神のそのような様々な迫害や訓練にも痛みは伴います。でも、それが私たちにとっては必要なのです。それによって、私たちがより成長させられ、いつの日かイエスの前に立つ時に褒美となって返ってくるのです。そのことをペテロはこのように告白しています。Iペテロ1:6-7「6 そういうわけで、あなたがたは大いに喜んでいますが、いまは、しばらくの間、さまざまな**の**試練の中で、悲しまなければならぬのですが、7 信仰の試練は、火を通して精練されてもなお朽ちて行く金よりも尊いのであって、イエス・キリストの現われのときに**の**称賛と**の**光栄と**の**栄誉に至るものであることがわかります。」「**の**信仰の試練」、つまり、神がお与えになる信仰を持っているが故の困難や試練は、私たちを「**の**精練」、つまり、どんどんきよめて純化していただくのです。神が私たち人間に対して、不必要な罪や欲望、また、間違った理解や常識、考え方、神ではなく自分自身に頼ったりするような傲慢さなど、そのような間違った未熟な思いを神が取り除いてくださるのです。

ここで、イエスはご自身のことを「**まことのぶどうの木**」(1節)であると話しておられます。「**まことの~**」と言われるからには、そうではない「ぶどうの木」があった訳です。ここの「**まことの**」と訳されていることばは「**本当の、正真正銘の、**」、または「**理想的な**」という意味のことばです。イエスこそ**本当の**ぶどうの木であり、**理想的な**ぶどうの木であったのですが、実は、イエスがこのように言われるからには、かつて、「**本物ではないぶどうの木**」があったのです。それは、神から選ばれた「イスラエルの民たち」でした(エゼキエル15:1-8; 17:6-8; 詩篇80:8-16; イザヤ5:1-7; エレミヤ2:21; 12:10; ホセア10:1など)。また、イザヤ5:1-7aを見てください。「1 **「さあ、わが愛する者のためにわたしは歌おう。そのぶどう畑についてのわが愛の歌を。わが愛する者は、よく肥えた山腹に、ぶどう畑を持っていた。2 彼はそこを掘り起こし、石を取り除き、そこに良いぶどうを植え、その中にやぐらを立て、酒ぶねまでも掘って、甘いぶどうのなるのを待ち望んでいた。ところが、酸いぶどうができてしまった。3 そこで今、エルサレムの住民とユダの人よ、さあ、わたしとわがぶどう畑との間をさばけ。4 わがぶどう畑になすべきことで、なお、何かわたしがしなかったことがあるのか。なぜ、甘いぶどうのなるのを待ち望んだのに、酸いぶどうができたのか。5 さあ、今度はわたしが、あなたがたに知らせよう。わたしがわがぶどう畑に対してすることを。その垣を除いて、荒れすたれるに任せ、その石垣をくずして、踏みつけるままにする。6 わたしは、これを滅びるままにしておく。枝はおろされず、草は刈られず、いばらとおどろが生い茂る。わたしは雲に命じて、この上に雨を降らせない。」7 まことに、万軍の主のぶどう畑はイスラエルの家。…**」と続きます。神が甘い実のなるのを期待した「ぶどうの木」はイスラエルでした。しかし、残念ながら、彼らは良い実を実らせることができなかつたのです。だから、**本当の、理想的なお方が、この地上に来てくださったのです。それがイエス・キリストです。ヨハネ15:1で「わたしはまことのぶどうの木であり」**の後には何と続いているでしょう?「**わたしの父は農夫です。**」ということばです。農夫である父なる神がぶどうの木の世話をしてくださるのです。それは「**まことのぶどうの木**」であるイエスに対してというよりも、むしろ、枝である私たちクリスチャンたちに対するものです。なぜなら、その農夫が刈り込みをするのはぶどうの木そのものではなく枝の方だからです。

ですから、みことばにもこのようにあるのです。マタイ6:4をご覧ください。「**あなたの施しが隠れているためです。そうすれば、隠れた所で見ておられるあなたの父が、あなたに報いてくださいます。**」とあります。また、同じマタイ6:6にも「**あなたは、祈るときには自分の奥まった部屋にはいりなさい。そして、戸をしめて、隠れた所におられるあなたの父に祈りなさい。そうすれば、隠れた所で見ておられるあなたの父が、あなたに報いてくださいます。**」とあります。6:18にも「**それは、断食していることが、人には見られないで、隠れた所におられるあなたの父に見られるためです。そうすれば、隠れた所で見ておられるあなたの父が報いてくださいます。**」、6:26でも「**空の鳥を見なさい。種蒔きもせず、刈り入れもせず、倉に納めることもしません。けれども、あなたがたの天の父がこれを養ってくださるのです。あなたがたは、鳥よりも、もっとすぐれたものではありませんか。**」とあります。7:11にも「**してみると、あなたがたは、悪い者ではあっても、自分の子どもには良い物を与えることを知っているのです。とすれば、なおのこと、天におられるあなたがたの父が、どうして、求める者たちに良いものを下さらないことがありましよう。**」とある通りです。天の神は私たちを守り導き、必要な訓練を与え、世話をしてくださっているのです。それは私たちを愛してくださっているからです。私たちも子どもを叱ったり厳しくしたりするのは、その子どもを愛しているからであり、成長してほしいからです。その子に期待している訳です。だから、

私たちは神の与えてくださる訓練を感謝し、喜んで受け入れて歩んで行くべきなのです。そうするときに、私たちに本当のあるべき成長があるのです。

でも、最後に、このことを覚えてください。皆さんが、実りのある枝であるかどうかを判断するのはだれでしょうか？神です。あなた自身でもなければ他の教会員でもありません。また、ある意味、牧師でもありません。もちろん、初めに引用した聖書箇所にあったように、ある程度は見分けることができますし、教会にはそのような責任も与えられています。しかし、究極的に評価してくださるのは神です。そうすると、このようなことも有り得る訳です。例え、人間の目には実りが見えない場合でも、神が実りを見出してくださっているかも知れないということ、あるいはその逆で、人間の目には多くの実りが映っている場合でも、神は全く実りを見出されないということです。どうして、そのようなことが有り得るのでしょうか？それは、イエスがこの箇所ですべて具体的な「実」とは何であるかということをお話しになっていないからです。それについては、また次回に、学んで行きたいと思うのですが、しかし、この箇所でのイエスの強調点は「どのような実を結ぶべきなのか？」ということではなく、「どのような枝が実を結ぶのか？」というところにあるのです。

私たちはしっかり主の与えてくださる訓練、試練を喜んで受け入れる必要があります。「神様は、このことを通して私たちをどのように用いてくださるのだろうか？どのように、成長させてくださるのだろうか？」と、そのように考えていろいろなことを前向きに受け止める必要があるのです。

「では、イエスにとどまるとはどういうことなのか？」ということについては、次の機会にごいっしょに学んで行きましょう。